
優しい嘘

紀本彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい嘘

【Nコード】

N1010I

【作者名】

紀本彼方

【あらすじ】

病的な嘘つきだと自負する主人公。そうなってしまった理由と、そうならざるを得なかった理由。愛する人にすら嘘を付き続けた彼の嘘がばれるとき、そこに待つものは？

ブローグ

ブローグ

「人生の採点つてやつをどうやるのわかるかい？」

君は真っ白いベッドの上で僕にそう訊ねた。

僕が「わからない」と言うと君は言葉を続けた。

「人は死ぬ間に人生を採点するんだ。もし、死ぬ瞬間にもう一度自分に生まれてきたいって思えることができたなら、きっとその人の人生は素晴らしいものだったんだろうなって思う」

君は儚く微笑みながら確かにそう言った。

そんな君の姿を見ていたら胸が詰まってしまって、僕は「君はもう一度自分に生まれてきたい？」というセリフを口に出すことが出来なかった。

それから数日もせずに君は僕の手の届かないところに逝ってしまい、結局、僕はその答えを聞くことが出来なかった。

だから、僕は想像する。君が今際に何を思い、何を考えていたか。そして、僕は考える。自分が死ぬ時にもう一度自分に生まれたいかってことを。

ただただ、考えるんだ。

1 終わりの始まり

「人間は罪深い。なぜなら人は嘘を平気でつける生き物だからさ。皆が皆、嘘をついている。多かれ少なかれね。私は一度もウソをついたことがない。私は正直ものだ、なんて言うやつこそが大嘘つきさ。君もそう思うだろ？」

僕は言葉を紡いだ。歌うように優しく。

テーブルの向こう側にいるシズクは僕を静かに見返した。そして、言う。

「私もそう思う。人は嘘をつく生き物だし、罪深い。でも、だからってユウキが嘘について良いって理由にはならないと思うけど？」

「そうだね。でも僕は知つての通り、病的な嘘つきなんだ。嘘をつかないと不安になる。自分を保てないんだ。高校の時だったっけ。進路希望調査の紙に詐欺師になりたいって書いたら親を呼び出されたよ。僕は至って真面目に書いたのに」

「そんなことしたら、親を呼び出されるに決まってるじゃない」

呆れたような声。シズクはテーブルの上のレモンティーに手を伸ばそうとするが、すでに空っぽになっていることに気付いて手を止める。改めて何かを注文する気はなさそうだ。

「うん。でも安心して。その話も嘘だから。僕は嘘つきだけど馬鹿ではない。常識くらいわきまえているさ」

ニヤリと笑う僕。ひっかけられたことにシズクは舌打ちをした。

「まったく、嘘つきと話をしていると疲れるわ。常に疑っていなきやいけないんだから。はあ、私はなんでこんなやつに惚れちゃったんだろう」

「さあね。それは僕が君に聞きたいくらいさ。あと一つ言うなら嘘つきと話す時は疑ってはいけないよ。そもそも最初から信用してはいけない」

「それも嘘？」

「これは本当。恋人をそんなに疑うなよ。傷付くだろ？」

僕が傷付いた表情を見せると、彼女は少し微笑んだ。

今、僕らのいるカフェは空いていた。僕とシズク以外に客の姿はなかった。もうお昼時とはとくに過ぎたし、下校途中の学生が来るには少し早い。そもそもこの店は流行っていないのかもしれない。コーヒーもさほど美味くなかった。

だけど、それはかえってありがたかった。静かで落ち着ける。なるべく人はいない方がいい。ここは別れ話をするにはちょうどいい所だった。

「そろそろ話してくれない？」

シズクが口を開く。僕は空気が変わったことを感じた。シズクもそう感じていることだろう。表情もどこか硬くなっている。先ほどまでとは違う、冷えた空気が流れている。少し間を置いてからシズクは続けた。

「なんで私たちが別れるのか。どこからどこまでが嘘なのか。そして……」

そこで言葉を切ってシズクは僕を見た。真っ直ぐな眼。僕はこの眼がとっても好きだ。

いつもは強い光を持っているのだけど、今日のシズクの眼は弱弱しかった。戸惑いと悲しみ。そんな想いが詰まっている。

そんな彼女を見るのは僕もすごく辛い。だけど僕は嘘つきだから、自分の気持ちに嘘について、感情に背を向ける。そして、そんなそぶりは見せずにただ微笑んだ。

「そして、何？」

続きを促す。

シズクが重い口を開いた。

「……あなたは誰なの？」

それは恐れていたけど、僕が望んでいた言葉だった。この言葉を引き鉄に僕らの終わりは始まる。

僕は深く息をついた。

しばらくの沈黙。

シズクは気まずそうに縮こまっていたが、僕はこの時間を楽しんでいた。なぜなら、これが、僕とシズクが恋人でいられる最後の時間だと思ったからだ。

引き鉄はもう引かれた。あとは僕が話をすれば全ては終わるだろう。

「どこから話そうかな。初めからとなると少し長くなるけどいいかな？」

「全部、話して」

強い意思のこもった言葉。僕はその言葉に押されて話を始めた。

2 嘘つきの語る回想1

僕にはニシモリユウキと言う友達がいた。

幼なじみってやつだね。親同士が仲の良い友人同士で近所に住んでいたんだ。

だから僕とユウキが会えるのは必然だった。

僕らはとても仲が良かった。性格は正反对だったのにね。ユウキは正直者で僕は知っての通り嘘つきだ。それだけなぜか馬が合ったんだ。案外、性格が正反对のほうが上手くいくのかもしれないね。僕の記憶を辿ると大体いつもユウキが隣にいる。二人でいろんなことをしたよ。

ささいなイタズラをして二人で怒られたりもしたし、ケンカもよくした。好きな子に振られて泣き明かしたこともあったつけ。

僕らはいつも一緒だった。保育園から始まって小中高、全部同じ学校だった。しかも違うクラスになったのは一度しかないんだ。なにか強い結びつきがあったとしか思えない。きっと僕らの前世は靴だっただろうね。僕が右足でユウキが左足。靴は二つで一つ。僕らも二人で一人みたいなものだったからさ。

もしも、どちらかが女の子だったとしたらきっと僕らは恋人同士になっていただろうね。ユウキが男だったことについては神様に感謝してるよ。もし、ユウキが女だったら、僕はきっとシズクと会えることもなく、恋に落ちることなかっただろうからね。

ユウキは優しい奴だった。いつだったか、こんな事があったよ。確か中学生二年生の時だった。ある日の放課後、僕が誤って教室に飾ってあった花瓶を割ってしまったんだ。

その花瓶は担任の先生がすごく大切にしていたものでね。壊したことがばれたら大目玉をくらうのは火を見るより明らかだった。

僕は考えたよ。もちろん、正直に謝ることなんて選択肢になかった。僕は迷ったのはこのピンチをどういう嘘で乗り切るかと言うこと

とだった。この辺りが僕の嘘つきたる所以だろうね。

幸いその時、人は誰もいなかったし、僕がやった証拠もない。さつさと立ち去れば、ばれる事はなかっただろう。でも僕は立ち去らなかった。どういう嘘をつけば誰も迷惑しないで事を済ませられるか。それを考えていたからだ。

グラウンド側の窓を開けて、花瓶の近くに野球のボールを置いておこうか。いや、それはダメだ。野球部に迷惑が掛かる。鳥の羽根でも置いといて鳥のせいにしようか。いや、少し無理があるか。そんなことを五分くらい考えていたかな。気付くと後ろから声がした。

「あなた、何やってるの！」

担任の女教師の声だった。自分の愚かさを呪ったよ。ボーっと考えていた所為で気配に全く気付かなかったんだ。

今思うと、ガキらしいささやかな失敗だったと思えるけど、その時の僕はすごく焦ったよ。だからとつさにあんな嘘を付いてしまったんだ。

「ユウキ君が割ってしまった花瓶を掃除していました」

なぜ僕がそんな言葉を発したのかは今でもよくわからない。それは僕が今までついた中で二番目にひどい嘘だった。

それでも一度出してしまった言葉は撤回できない。僕はそれを取り繕うように次々と嘘を並べた。何て言ったかはよく覚えていない。ただ気付いた時には担任の姿はなかった。

帰り道、玄関から職員室を見ると、職員室の窓から担任とユウキが話している姿が見えた。

悪いことしたなあ、と思いながらも僕は家に帰った。ユウキが一言、「僕はやってません」と言えば済む問題だと思ったからだ。

ユウキは学校でも誠実で真面目な生徒で通っているし、そのユウキと嘘つきな僕を天秤にかけたら間違いなくユウキの方が勝つだろう。

それでも、やはり気になったので僕は家に鞆を置くとすぐにユウ

キの家に行った。

僕とユウキの家は目と鼻の先だ。歩いて一分ほどのところにある。家に着き、チャイムを押す。誰も出てこない。

僕は家の前で待つ事にした。

一分、十分、三十分経つてももユウキは帰ってこない。いくらなんでも遅い。先生に説明するくらいなら十分あればお釣りが来るだろう。

ユウキが帰ってきたのはそれからさらに一時間後だった。

「あれ？何してんの？」

それがユウキの第一声だった。

「何って……。お前こそこんな時間まで一体、何やってたんだよ」
ユウキのけろつとした態度に僕は戸惑いながらもそう言った。

「俺？怒られて、罰として便所掃除させられてた」

事も無げに言うユウキ。僕は呆氣にとられた。何を言っているんだ？こいつは。

「な、なんでお前がそんなことやってんだよ。身に覚えのないことだろ？なんでやってないって言わなかったんだよ！」

それはほとんど怒鳴り声だった。それにしても変な話だろ？罪を着せられたやつが、着せたやつに怒られているんだからさ。

「おいおい、そんな大きな声出すなよ。それに別に全く関係なくもないさ。本当はお前が花瓶を割ったんだろ？」

「そうだけど……」

「じゃあ、別にいいだろ。お前が怒られるのも俺が怒られるのもそんなに変わらないさ」

正直、その言葉はとても嬉しかった。それこそ、僕の人生でベスト3に入るほどに。その反面、ユウキに罪を着せたことに罪悪感を覚えた。

「それにお前やったってばれたら便所掃除じゃ済まなかっただろうしな。日ごろの行いが悪いし。それより、寄ってくだろ？入れよ」
ユウキは気にするなよ、と言った感じで笑いながら家の中に入っ

ていった。僕もそれに続いた。

その日はきつと、ユウキにとってみれば大したことのない一日だったんだろう。本当のことを言わずに怒られたのも、先生受けの悪い僕が怒られるより自分が怒られた方が軽く済むだろうと言う単純な考えからだったにすぎないと思う。

でも、僕はその日をよく覚えてる。嬉しかったんだ。ユウキの何気ない思いやりが本当に嬉しかった。

だから、僕はこの日、自分に誓ったんだ。

自分は何があってもユウキを裏切らない。あいつが何かあった時は必ず助けるってね。

僕は嘘つきだけど、この時に思ったことは嘘じゃない。

事実、僕はそれを守ったよ。

3 再び現在

「・・・少し騒がしくなってきたね」

僕は話を切って辺りを見回した。

さっきまで人がいかなかった店内が少しだけ騒がしくなってきた。

時刻は五時過ぎくらいだろうか。客のほとんどは高校生だ。皆、適当に飲み物や料理を注文しておしゃべりを楽しんでいる。

てつきり、流行ってない店だと思っていたのに誤算だった。

「場所を変えましょうか」

シズクが言った。僕も同意して席を立った。

外は日も落ち始め、少し肌寒かった。六月というのはとても中世半端な季節だ。春でもないし、夏でもない。昨日まで暑かったと思えば、翌日はいきなり寒くなったたりもする。一日の間でも気温はころころ変わるし、服装の調節が大変だ。

タンクトップにキャミソール、その上に薄手のカーディガンを羽織っただけのシズクは少し寒そうにしていた。僕は自分の着ていた長袖のシャツを脱いで彼女に着せようかと考えたが止めた。今の僕にそんな資格があると思えなかったからだ。

しばらく、二人は無言で歩いた。

どこへ向かっているのか、どちらもわかっていなかった。ただ、立ち止まるわけには行かないから街の雑踏を、微妙な距離を保ったまま歩いていった。

五分ほど歩くと運良く、誰もいなくて静かな場所を見つけることができた。

そこは小さな公園だった。あるものは、木と錆びたブランコと古びたベンチだけ。隣にはテニスコートがある。そのベンチのに並んで座る。相変わらず微妙な距離を保ったまま。

最初に口を開いたのは僕だった。

「さてと、じゃあ続きを話そうか」

「待って」と、シズクが僕の言葉をさえぎった。そして続ける。

「その前に一つだけ教えて。ここまでの話でわかったことは、あなたにはユウキっていう友達がいること」

「うん」

「そして、あなたは私にその名を語っていた。私がこの二年間ユウキって呼んでいたあなたの、本当の名前は何なの？それだけ教えて」
真摯な表情。それだけ不安なのだろうと僕は思った。それはそうだろう。恋人の名前が偽名だったのだから。

「僕の名前か。もう今さらだから言ってもいいけど、もう知ってるんじゃないのか？僕の免許書見たんだろ？」

そう、それが僕の犯した失敗だった。たまたまシズクに免許書を見られてしまったのだ。

さすがに免許書まで偽名にすることはできない。そして全てはそこから崩れ始めた。全く、僕も詰めが甘い。つくづくそう思う。

「確かに免許書を見たけどすぐあなたに取られたからよく見えなかったし、何より難しい漢字で名前が読めなかったわ」

「ああ、確かに僕の名前の読みは難しいね。親が一目で見ても読めない名前ってことをコンセプトに名付けたものだからね。父が言うには難しい漢字の名前は一度覚えさせればなかなか忘れないものらしい。確かにそうかもしれないけど、名前を間違えられる度に訂正しなきゃいけない息子の苦労も少しは考えて欲しかったよ」

「・・・なんか、話をはぐらかそうとしてない？」

不信感もあらわに僕を睨んだ。

どうやらシズクの中で僕の誠実さの株は大暴落しているようだ。

まあ、無理もないか。

僕はあわてて言い繕う。

「爽熙。僕の名前はサキって言うんだ。爽やかに喜び楽しむって意味らしい。まあ理由なんて後付で、ただ読めなさそうなのを考えた

ただだろうけど。爽熙って書いてサキと読める人なんて稀だよ」
空中に指で文字を書きながら必死に説明する。

なんとか納得してくれたのか表情の陰は少し薄れた。

「サキかぁ・・・」

何か噛み締めるようにつぶやくシズク。

「いい名前じゃない。確かにあなたって『ユウキ』より『サキ』って感じがするわ。・・・サキ。サキくん。サキさん。サキちゃん。サキっち。サキリン。うーん、やっぱ、サキが一番しっくり来るわね」

しみじみとつぶやく。

その表情はカフェにいた時のそれとは違い、落ち着いたものだった。それを見て、僕は理解した。

もう、シズクは覚悟を決めている。諦めている、と言った方が正しいかもしれない。おそらく僕と別れるつもりだろう。

彼女は芯の強い女性だ。思ったことを変えることはきつとしないだろう。

僕らは今日終わる。そう思うと悲しみが心の奥底から湧き出てきて胸が痛くなった。心臓は早鐘のように波打つし、のどはカラカラだ。

でも、それも仕方がない。僕はそれだけの仕打ちを彼女にしてしまったんだから。もし、僕と彼女の立場が逆だったとしたら僕もやっぱり深く傷付いたかもしれない。

「話を続けるよ」

これは儀式なのかもしれない。僕たちが別れるための。

4 嘘つきの語る回想2

ある時、ふとユウキがこんなことを言ったんだ。

「サキ、海が見たい」

本当にそれは唐突だった。オーディオからCDを取り出そうとしたらそこには温かいピザが入っていました、ってくらい唐突な発言だった。

それは確か夏休みも終わりに近づいてきた日の夜だった。

僕はユウキの部屋に泊まりに来ていた。そのこと自体は別に珍しいことじゃない。僕らは互いの部屋を頻繁に行き来していたからね。ユウキの部屋はもう自分の部屋のようなものだった。

ちようど本を読んでいたのだと思う。本のタイトルは思い出せない。とにかく僕はその本から顔を上げユウキを見据えて言った。

「海？こんな時間にか？」

傷だらけの柱に取り付けてある壁掛け時計を見る。時計の針は、もうとつくに夜の十二時を過ぎている。

「うん。今から急げば日の出には間に合うだろ。朝日を見よう」

僕はそこでやっと本をたたんだ。ユウキの声の中に真剣さを感じたからだ。

「え？何？本気で言ってるの？」

「うん。海に行こう」

ユウキは時々、いきなりこういうこと言い出した。いつもは冷静で大人びている感があるが、たまにハチャメチャなことを言い出す。壊れた目覚まし時計のようなやつだった。

「いきなり、なんで、海なんだよ。こんな時間にさ。それに行くなら別に明日の昼間でもいいだろ」

なんとか止めさせそうと説得する。さすがに、こんな遅くにわざわざ何時間もかけて海に行く気にはなれない。

「俺は海に行きたいわけじゃないんだ。特別なことがしたいんだ」

「特別なこと？」僕はそう言つて眉根を寄せた。

「そう、特別なことさ。中学最後の夏休み。俺たちは何をした？なんか特別なことをしたか？朝起きて、遊んで、夜寝て、また朝だ。なんていうか、物足りないんだよ。十年経つて今を思い出した時、何を思い出せる？きつと今のままなら平坦な日常しか思い出せないはつきりとした『特別』が欲しいんだ」

饒舌に語るユウキ。僕はユウキの言うことも一理あると思った。でも、果たして夜中に海に行くことが『特別なこと』になりうるのかは少し疑問だった。結果から言えばユウキの言ったことに間違いはなかった。現に十年たった今でも僕はこの日のことを鮮明に覚えているのだから。

僕はもう一度、壁の時計を見た。時刻は午前一時五分。ここから一番近くの海まで自転車ですり三時間ちよつと。今から出れば日の出に間に合う。僕は視線を時計から下に下げた。

時計を掛けている柱を見る。傷だらけの柱。それはよく見れば意図的に刃物で傷付けられたものだわかる。これは僕とユウキが背比べをするためにつけた傷だった。幼稚園の頃から毎年やっているから柱は傷だらけだ。

その傷は言わば、僕らの友情を形に表したものだ。照れくさくて言葉に出したことはなかったが、ユウキもそう思ってくれていたと思う。

だから、僕はその傷を見て決意した。

「お前の言いたいことはよくわかったよ。海、行くか」
「いいのか？」

ぱつと目を輝かせるユウキ。ここから僕らの幼い冒険は始まった。さすがに、こんな時間に堂々と玄関から出て行くわけには行かない。そこで靴をそつと取ってきて窓から出ることにした。

トイレに行くフリをしてそつと靴を取りに行く。そこまでは簡単だった。そこから外に出るまでには少し苦労した。

ユウキの部屋は二階だったからいきなり飛び降りるわけにはいか

ない。だから雨どいを伝って下りようということになった。

一番目は僕。雨どいのつなぎ目にスニーカーを引っ掛けながらと下りていく。途中、何度か滑り落ちそうになりつつもなんとか無事に下り切った。

次にユウキが下りてくる。ユウキはなんとも器用にするすると下りてくる。こいつは忍者かってくらいにスムーズな動きだ。

「お前、抜け出すの今日が初めてじゃないだろ」

「まあ、たまーにな」

僕の問いにユウキは舌を出して答えた。

次に自転車を出さなくては。さすがに何十キロもある海までの道を徒歩で行くわけにはいかない。

玄関の脇に停めてあったユウキの自転車を、音を立てないように外まで運ぶ。

「よし、サキンちから、サキの自転車取ってこよう」

通りに出るとユウキがそう行った。

僕は無言で微笑みながらうなずいた。

この辺りまで来るとだんだん僕もわくわくしてきて楽しくなってきた。なんだか秘密の冒険のようだ。

これはきつといい思い出になる。そう確信していた。

5 嘘つきの語る回想3

これはきつといい思い出になる。そう確信していた僕だったが。その確信があつさりと揺らいだのは出発してから二時間半後だった。

「今どの辺りだ？」

「さあ」

「今何時だ？」

「さあ」

「朝日に間に合うのか？」

「さあ」

僕の問いにユウキは適当に答える。その声には疲労とイライラがにじみ出ていた。

無理もない。僕だってそうだ。

もう僕らは自転車に乗っていなかった。

出発から三十分ほどで僕の自転車がパンクした。僕は自転車を乗り捨て、ユウキの自転車に二人乗りすることにした。ユウキは「仕方ない。これも思い出の一つになるさ」とニコニコ笑いながら言った。僕も「そうだな」と笑いながら頷いた。この頃はまだ余裕があったんだ。

海に行くためには大きな山を越えなければいけない。僕らはこぎ手を交代しながら必死にアップダウンを繰り返す山道を走っていた。だんだん体力はなくなってくる。それにつれて口数が少なくなる。

上り坂はまだよかった。問題は楽だと思っていた下りだった。体力的に辛かった上りを登りきった僕らは二人乗りで一気に下りを駆け抜けようとした。それが間違いだった。二人分の体重を乗せた自転車はがanganスピードを上げていき、ついにはブレーキが壊れてしまって止まれなくなった。

まるで絶叫マシンのような感じで僕らは為すすべもなく自転車から転げ落ちた。

だが、ある意味、それは幸運だった。自転車から投げ出された僕らは擦り傷だらけになったけど、加速のついた自転車本体はガードレールにぶつかってそのまま崖の下へと落ちていった。

青ざめら顔を見合わせた僕ら。ふと、なんでこんなところで、こんなくぐらなくてもいいような死線をくぐっているのだろうという思いが脳裏によぎる。

誰もいない夜中の山道。歩いて引き返すのもこのまま突き進むのもどちらも距離的には変わらない。そう判断した僕らは突き進むことにした。

それが二時間前のこと。そして今に至る。

「夜明けまで、あと一時間くらいか」

空を見て、ユウキがそう呟く。

僕は答えなかった。疲れていたこともあったし、ユウキの方も答えを求めているような口ぶりではなかった。

「なあ、サキ」

今度ははつきりとした声。僕は歩を緩めずに左隣のユウキを見た。

「何？」

「サキは好きなやついる？」

「は？いきなりなんだよ」

「いや、特に理由はないけど、なんとなく」

少し罰の悪そうなユウキ。いきなりの突飛な質問に内心焦る僕。

この頃の僕らは色恋沙汰についてはほとんど話をしたりしなかった。なんだか気恥ずかしい感じがしたからだ。多分、きっとユウキも似た思いを持っていたはずだ。こんな思春期だった頃もあるんだ。可愛いもんだろ？

いつもだったら「何言ってるんだよ」って返して終わりになる恋バナも、この状況だと少し違った。

修学旅行の夜に、布団にこもりながら好きな子の名前を言い合う。

そんな経験があるだろ？今の不意息はそれに似ていた。妙なテンション。僕は少し間を置いて告げた。

「別にいいよ。かわいいなって思う子くらいいるけどさ」

「ふーん」

聞いてきたくせに返事はそっけなかった。真面目に答えた僕がなんだか恥ずかしくなる。顔の紅潮を誤魔化すように質問を返す。

「お前こそ誰がいるのかよ？」

「いない」

それは即答に近かった。あらかじめ、質問の答えを用意していたかのようだ。多分、そうなのだろう。

「いないんだよ。本当に」ユウキは、つぶやくように繰り返す。

「いいなって思う子もいない？」

「うん」

「だから告られても全部断ってんの？」

話は少し逸れるけど、ユウキは人気があった。全体的に線が細く、温和な顔だけど、眉目はしっかり整っているし、勉強もできた。運動だってできるほうだし、なにより正直で明るく性格がいい。これだけ男にも女にも好かれるやつは珍しいかもしれない。

「付き合うつてのがよくわからん。好きって気持ちもよくわからない。好きってなんだ？」

いきなり哲学的な質問をぶつけられて、少し戸惑う僕。

「一緒にいて楽しいとか落ち着くとか、そんな気持ちが好きってことじゃないかね？」と、無難な言葉を返す。

「うーん。楽しいとか、一緒にいて楽とかならサキといるのが一番だからなあ。だからと言って、その気はないし」

「俺と恋愛の好きをまぜこぜにするなよ」

あきれて僕は言った。そのまま続ける。

「好きってのはもつとなんだ、胸が熱くなると言つか、切なくなると言つか、なんだその」

だんだんと恥ずかしくなってきた言葉が詰まる。なんでこんな山

道をへとへとになりながら歩いているときに、こんな真面目に語っているんだろう。

6 嘘つきの語る回想 4

「あっ！」

ユウキが唐突に叫び声を上げた。

疲れとわけのわからない恥ずかしさでうつむいていた僕はその声で顔を上げた。

「あーっ！」

僕も釣られて声を上げた。道の向こうに砂浜とかすかな青が見えたからだ。

僕は疲れも忘れ走り出した。どこにそんな力が残っていたのだろうつていうほどの速さ。駆けっこをするかのように二人で走り出し、砂浜に着くと、砂にまみれるのも関係なく突っ伏した。

「なんとかなるもんだね」

切れ切れの息の合間にユウキが笑いながらそうこぼした。

潮の香りと、波の音。砂の感触は間違いなく海だった。風が心地よい。人は誰もいなかったがそれが逆に気持ちよかった。

まだ薄暗い。日の出には間に合った。日の出はいつだろう。ケータイの電池は切れているし、時計がないから時間がわからない。そもそも、日の出が何時なのかも検討がつかない。

まあ、いいさ。待ってれば日は必ず昇る。

僕らは砂浜で並んで寝転がって朝日を待った。

海に着いただけでこの達成感。ご褒美の水平線から上る太陽を見たらどれだけ感動できるだろう。

「楽しみだな、朝日」

「うん」

「途中どうなるかと思ったけど、来てよかった。誘ってくれてありがとな」

こんなに自然に礼を言えたのは初めてだった。その直後。

鼻先に冷たさを感じた。

次は左手。

それを疑問に思う前に雷が鳴り響き、それに呼ばれるようにどしや降りの雨が降ってきた。

完全に荒れ狂う海。もう朝日どころじゃない。

言葉を失い、顔を見合わせた僕ら。互いの呆然とした顔を見ながら、全く同じタイミングで笑い転げた。

結局、朝日は見れなかったけれど、一番最初にユウキが言ったとおり忘れられない思い出になった。

擦り傷だらけになって、激しい雨に降られ、結局朝日は見れず、次の日に二人して風邪を引いてしまったけど、これは僕にとって最高に楽しい思い出になった。

今にして思えば、それは僕らにとって最後の楽しい記憶だったからかもしれない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1010i/>

優しい嘘

2011年5月30日23時11分発行